

エメ・セゼールの『もうひとつのテンペスト』 におけるキャリバンとカニバル

高 岸 敦 夫

1. 植民地劇としての『テンペスト』

ウィリアム・シェイクスピアの『テンペスト』は1950年代末から70年代初期にかけてカリブ海の作家・批評家によって様々な改作や批評がなされてきた。この一連の改作・批評において、登場人物の一人で主人公プロスペロに反抗する奴隷のキャリバンは、植民者の抑圧に抵抗するため戦う被植民者のシンボルとされ、賞賛されるべき人物へと変貌した。本稿ではそのような『テンペスト』の書き換え・読み替えの一つであるエメ・セゼールによる改作『もうひとつのテンペスト』を取り上げる。エメ・セゼールはカリブ海の小アンティル諸島にあるマルティニックの詩人・政治家であり、ネグリチュードの提唱者として知られている。ネグリチュードはそれまで抑圧され続けていた黒人の尊厳と主体性の回復を訴えるというものであるが、1969年に発表された彼の『もうひとつのテンペスト』はネグリチュードを劇という枠組みで具現化し、民衆に伝えようとしたとされている。そこでのキャリバンは黒人奴隷へと変更され、独善的な支配者プロスペロに立ち向かう英雄的な人物となっている。本稿ではそのようなセゼールによる『テンペスト』の改作をキャリバンCalibanとカニバルcannibaleの類縁性という観点から論じていきたい。

2. キャリバンとカニバル

カニバルとはカニバリズム（食人）の習慣を持った人、あるいはそれを実践している人のことであるが、ヨーロッパ諸国の植民地において先住民や奴隷に対する侮蔑語としてしばしば用いられてきた語である。カ

ニバルやカニバリズムはもともとコロンブスがカリブ海の先住民であるカリブ族を食人族と決めつけ、それが流通していった言葉であり、カリブ海と同じルーツを持っている。このようにカニバルの表象は植民地主義と深い結びつきがあり、ポストコロニアル批評においてこうした問題はしばしば俎上に載せられている。文明と野蛮とを区分する際に野蛮なものの特徴として必ずといっていいくらい登場するのが食人習慣である。また食人表象と植民地主義との関係を文学テキストから読み解く試み¹⁾において必ずといっていいくらい登場するのがシェイクスピアの『テンペスト』である。しかしながらシェイクスピアの『テンペスト』にはカニバリズムはおろか、残虐な描写すら全く見られず、キャリバンを食人の慣習を持った人物と見ることに無理がある。にもかかわらずキャリバンはしばしばカニバルと結びつけられている。これはキャリバンの名前の由来がカニバル（英語ではcannibal）のアナグラムであるという説によるところが大きい。正木恒夫が指摘するように「キャリバン＝カニバル」説は特に根拠があるわけではないのだが、『テンペスト』を植民地の劇として読み解く人々の多くが、この説を自明のこととしている²⁾。これはキャリバンを自らと同一視して、『テンペスト』を読み替えようとするカリブ海の知識人の多くにも当てはまる。例えばエドゥアール・グリッサンは『アンティル論』においてキャリバンを次のように説明している。

Cannibale. Shakespeare nous a donné le mot, nos écrivains l'ont refait.³⁾

このようにキャリバンを称揚する立場もキャリバンとカニバルとを結び付けているのは、両者の歴史的コンテキストの共通性が大きいゆえであろう。カニバルはカリブ族を由来としているが、カリブ族が実際に食人習慣を持っていたどうかはわかっていない。実際に人を食べる光景を見たこともないのに異質な他者を人食い人種と決め付けるということはよくあることであるが、カニバルという言葉の誕生自体もこうした背景に

よるものではないかとも指摘されている⁴⁾。一方キャリバンも「奇妙な魚 (strange fish)」など様々な非人間的な形象の言葉で呼ばれているが、シェイクスピア初の全集の登場人物リストにおいてキャリバンは「野蛮で異形の奴隷 (a savage and deformed slave)」と記されている。この「野蛮な」や「野蛮人」を意味する *savage* (フランス語の *sauvage* に相当する) という言葉もカニバルに連なるものである。というのも食人習慣は野蛮なものに欠かせない属性であり、ジャン・ド・レリーの『ブラジル旅行記』やダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』のように食人習慣を持った *savage* (*sauvage*) が登場するテキストは数多くある。このように *cannibal* (*cannibale*) や *savage* (*sauvage*) などの「野蛮人」や「人食い人種」を意味する言葉は区別が曖昧であり、分ち難い関係にある。

しかしながらカニバルやカニバリズムのイメージは被植民者の立場に立つ知識人・作家から否定的なものとして捉えられているというわけでは必ずしもない。むしろ否定的・侮蔑的なイメージを持つカニバリズムのイメージを称揚し、自分たちの文化アイデンティティの中に取り入れようとする言説が徹底的な植民地化に直面した地域、諸アメリカ、とりわけブラジルの文芸において非常に活発に見られる。カニバリズムの目的や対象とするものは様々だが、肉体を摂取することによって、相手の霊的な力を得ることができるとよくいわれている。このようなイメージを文化の受容という問題で取り入れようとしているのである。つまり他者の文化を単に受容するのではなく、栄養として自己の内に取り込み、十分に消化した上で、そこから新たな自己を再創造することが主張されるのである。そのような主張はカニバルやカニバリズムという言葉の発祥地であるカリブ海諸島でも見られる。例えばブラジルの食人主義から影響を受けているグアドループ出身の作家マリーズ・コンデはカニバリズムという表現を好んで用いている。彼女は自分がフランス語を使うことについてフランス人から与えてもらったものではなく、祖先たちが盗み出し、それをカニバル化したフランス語だと主張している。また彼女には文学的カニバリズムを論じた「英雄とカニバル」というエッセーが

ある⁵⁾が、そこではシェイクスピアの『テンペスト』の例に見られるような西洋文学の正典と目されている文学作品の書き換え行為が文学的カニバリズムと呼ばれ、さらにキャリバンの反抗とカニバリズムが同一のものに結び付けて論じられている。とりわけシェイクスピアの『テンペスト』の以下のキャリバンの台詞はコンデにとってカニバリズムを想起させるのである。

お前は俺に言葉を教えたが、それで得たものといえば、呪うことを覚えたことぐらいだ。疫病でくたばれ、お前の言葉を俺に教えた罰でな。⁶⁾

これはキャリバンがプロスペロらと同じ言語を使っていることについて述べるくだりであり、『テンペスト』の中でもとりわけ有名である。この台詞は植民地主義と言語使用の問題を論じる際にしばしば比喩として使われている。プロスペロは魔術師であり、キャリバンにとってプロスペロの魔術は自分を縛りにかける呪いであり、また主人の言葉も自分を飼い慣らそうとする呪いである。しかしキャリバンは逆に支配者の言葉を使ってプロスペロ達に呪いをかけて、プロスペロの呪縛を破ろうとする。コンデは「アンティル諸島の人間は文化的に文学的にこのカリバン〔キャリバン〕の末裔なのです」と講演の中で述べている⁷⁾。

3. セゼールにおけるキャリバンとカニバル

しかしながらセゼールの『もうひとつのテンペスト』の場合はキャリバンとカニバルは必ずしも結びつかない。むしろ両者を引き離そうとする動きが見られる。セゼールの『テンペスト』においてcannibaleという言葉は一箇所だけ使われているが、否定的な意味合いを帯びており、かつそっけないものである。

PROSPERO

Diable! On devient susceptible! Alors propose... Il faut bien que je t'appelle! Ce sera comment? Cannibale t'irait bien, mais je suis sûr que tu n'en voudras pas! Voyons, Hannibal! Ça te va! Pourquoi pas! Ils aiment tous les noms historiques!

CALIBAN

Appelle-moi X. Ça vaudra mieux. Comme qui dirait l'homme sans nom. Plus exactement, l'homme dont on a volé le nom. Tu parles d'histoire. Eh bien ça, c'est de l'histoire, et fameuse! Chaque fois que tu m'appelleras, ça me rappellera le fait fondamental, que tu m'as tout volé et jusqu'à mon identité! Uhuru!⁸⁾

このように彼はキャリバンという名前を支配者に押し付けられたものとして拒絶する。そしてカニバルやハンニバル⁹⁾という名前も受け入れず、Xと呼ぶように主張する。ここでキャリバンの言うXはいうまでもなくマルコムXを呼び起こさせるもので、さかのぼって知ることのできないアフリカの姓の象徴であり、白人によって押しつけられた姓を捨てることを意味する。また最後にキャリバンが発するUhuruはスワヒリ語で自由を意味する語で、アフリカの民族独立のスローガンとしてしばしば用いられた言葉である。ここで見られるようにセゼール版のキャリバンはプロスペロによって貼り付けられた自分のレッテル・汚名を唾棄することによって本当の自己を見出そうとする。こうしたキャリバンの基本的な姿勢は人喰いというレッテルをあえて自己のアイデンティティのために取り入れる食人主義と対照的だといえるであろう。

また先に引用したシェイクスピアの文章に対応する箇所において、セゼール版のキャリバンはプロスペロに対して真っ向から反論する形で応酬し、「言葉を教えてやった」のは単に餌らしやすくするためという意図で押し付けているだけだと喝破する。

D'abord ce n'est pas vrai. Tu ne m'as rien appris du tout. Sauf, bien sûr à baragouiner ton langage pour comprendre tes ordres : couper du bois, laver la vaisselle, pêcher le poisson, planter les légumes, parce que tu es bien trop fainéant pour le faire. Quant à ta science, est-ce que tu me l'as jamais apprise, toi? Tu t'en es bien gardé! Ta science, tu la gardes égoïstement pour toi tout seul, enfermée dans les gros livres que voilà.¹⁰⁾

セゼール版のキャリバンは論客のようなところがあり、自由や暴力などについて雄弁に語るが、キャリバンとプロスペロの口論は常にキャリバンの優位に進む。キャリバンはプロスペロの人間性・手の内を見通している。これは隷属する立場の人間のほうが優位であるというセゼールの考えが投影されているといえるであろう。セゼールは1955年に発表した『植民地主義論』で次のように述べている。

Les colonisés savent désormais qu'ils ont sur les colonialistes un avantage. Ils savent que leurs « maîtres » provisoires mentent.

Donc que leurs maîtres sont faibles.¹¹⁾

『もうひとつのテンペスト』はこのような奴隷と主人との関係に対するセゼールの考えを体現しているといえよう。しかしそうしたキャリバン像はマリーズ・コンデには「理屈っぽく、長広舌を振るう、ちょっと退屈な人物」と写るようでもある¹²⁾。

『もうひとつのテンペスト』においてキャリバンが否定するのは、キャリバンという名前やプロスペロから「言葉を教えてやった」ということだけにとどまらず、彼はプロスペロが自分に対して貼り付けたありとあらゆるレッテルを憎み、これを徹底的に否定している¹³⁾。終盤にある次の台詞はそのようなキャリバンの態度が最もよく表されているといえるであろう。

Prospero, tu es un grand illusionniste :
 le mensonge, ça te connaît.
 Et tu m'as tellement menti,
 menti sur le monde, menti sur moi-même,
 que tu as fini par m'imposer
 une image de moi-même :
 Un sous-développé, comme tu dis,
 un sous-capable,
 voilà comment tu m'as obligé à me voir
 et cette image, je la hais! Et elle est fausse!
 Mais maintenant, je te connais, vieux cancer,
 et je me connais aussi!¹⁴⁾

このようにプロスペロの魔術とは偽りの世界、偽りの自分の姿を本物だと信じ込ませたイリュージョンだとキャリバンは喝破し、自分たちに貼り付けられたレッテル・汚名を唾棄することによって本当の自己を見出そうとしている。自分たちに張られた負のイメージを逆利用してそれを自己のアイデンティティに取り込もうとするマリーズ・コンデのような食人主義的な考えとは対照的な姿勢が見られるのである。

4. 脱植民地化のために

それではプロスペロから押し付けられたものを否定してキャリバンはどのように自己を見出すのかということ、やはりアフリカ的なものに目を向けているところがある。初めてキャリバンが登場する場面ではプロスペロと次のようなやり取りを交わしている。

Caliban entre

CALIBAN

Uhuru!

PROSPERO

Qu'est-ce que tu dis?

CALIBAN

Je dis Uhuru!

PROSPERO

Encore une remontée de ton langage barbare. Je t'ai déjà dit que je n'aime pas ça. D'ailleurs, tu pourrais être poli, un bonjour ne te tuerait pas!

CALIBAN

Ah! J'oubliais... Bonjour. Mais un bonjour autant que possible de guêpes, de crapauds, de pustules et de fiente.¹⁵⁾

このようにキャリバンは登場していきなり Uhuru という言葉を発するが、プロスペロには全く理解できない。この他にもキャリバンがアフリカ伝来の神シャンゴーに祈りを捧げている場面などもある¹⁶⁾。キャリバンが表現するアフリカの言葉はこのようになぜかものしかないが、彼にはアフリカの言葉の意識がしっかりと残っている、プロスペロの支配を越えた自分の言葉を有しているといえるかもしれない。とはいえこれはアフリカのなものへの回帰を示すだけにとどまらない。Uhuru はアフリカの民族独立運動から諸アメリカの独立運動や公民権運動にまで拡大したスローガンであり、世界的に広く知られるようになった言葉である¹⁷⁾。またシャンゴーはブラジルのマクンバなどのアフリカの宗教とキリスト教とのシンクレティズムから成立した諸アメリカ各地の様々な宗教で崇拝の対象になっている。このように『もうひとつのテンペスト』におけるアフリカ回帰的なものは同時に諸アメリカの現状を表すものにもなっている。

しかしながらそうはいつでもキャリバンが使っている言葉はそのほとんどがプロスペロの言語ではないか、支配者の言語（ここではフランス語）を使い続ける限りプロスペロへの屈服にはならないか、といった意見も出てくるかもしれない。確かにキャリバンがプロスペロと同じ言語を使い続けるということは、彼を押し付け、飼いならそうとするプロスペロの呪いが残され続けることである。実際エメ・セゼール自身もフランス語で作品を書いていることやクレオール語を積極的に擁護しないことに対して非難を受けてきたのであり、この作品が抱える問題とセゼール自身の言語使用の問題は大きく共通している¹⁸⁾。こうした問題を最もよく現れているのがこの劇の最後の場面であり、「*LA LIBERTÉ OHÉ, LA LIBERTÉ!*」¹⁹⁾というキャリバンの歌が聞こえてきてくるという終わり方になっている。「*Uhuru!*」ではなく「*LA LIBERTÉ!*」という言葉によってこの劇は締めくくられる。これは主人の言語への同化で意味するものであるかもしれないが、マリーズ・コンデの述べている言語のカニバル化と呼べるものとも解釈できる。『もうひとつのテンペスト』におけるキャリバンの言葉・彼の数々の主張は、プロスペロによって与えられたものではなく、自らの意思と力で獲得したものだからである。

ルーシー・リックスが指摘している²⁰⁾ように、セゼールの『もうひとつのテンペスト』は、本質主義的なネグリチュードのヴィジョンを持って書かれたにもかかわらず、多義的解釈を許す柔軟さと複数性を持ち合わせている。*Uhuru*などといった言葉やシャンゴの歌は単に作品を彩る装飾に過ぎないのかもしれないし、キャリバンやセゼールのアフリカへの意識を呼び起こすものかもしれない。あるいはまた大西洋をまたがって育んできたカリブ海域の横断的な混淆文化を表しているのかもしれない。セゼールの『もうひとつのテンペスト』は脱植民地化のためにキャリバンを勇敢な英雄へと転化させてはいるが、それによって文化的・言語的同化や依存の問題が解決されてはおらず、問題を抱え込んだまま劇が閉じられている。しかしそれゆえにそこからわれわれは多様な解釈を呼び起こさせるものとなっているのである。（博士課程後期課程）

注

- 1) このような研究の先駆者はピーター・ヒュームであり、彼は今日のカニバリズム研究において欠かすことのできない人物となっている。Cf. ヒューム、ピーター（岩尾龍太郎／正木恒夫／本橋哲也訳）『征服の修辞学』、法政大学出版局、1995
- 2) 正木恒夫『植民地幻想』、みすず書房、1995、p. 62.
- 3) Glissant, E., *Le discours antillais*, Gallimard, Folio Essais, 1997, p. 824.
- 4) こうした問題に注目し、研究を行った先駆者として人類学者のウィリアム・アレックスが挙げられる。Cf. アレックス、ウィリアム（折島庄司訳）『人喰いの神話』、岩波書店、1981
- 5) コンデ、マリーズ（三浦信孝編訳）『越境するクレオール』、岩波書店、2001に所収
- 6) Shakespeare, W., *The Tempest*, Oxford University Press, 1987, p. 121.
 You taught me language, and my profit on't
 Is I know how to curse. The red plague rid you
 For learning me your language!
- 7) EU・ジャパンフェスト日本委員会編、根本長兵衛監修『グローバル化で文化はどうなる?』、藤原書店、2003、p. 143.
- 8) Césaire, A., *Une Tempête*, Édition du Seuil, 1969, p. 28.
- 9) ちなみにハンニバルとはここでは古代のカルタゴの将軍のことを意識しているだろうが、今日ではむしろトマス・ハリスの小説の登場人物である人食い医師のハンニバル・レクターを想起する人のほうが多いであろう。セゼールも予期しなかった効果がここに現れているといえる。
- 10) *Ibid.*, p. 25.
- 11) Césaire, *Discours sur le colonialisme*, Présence Africaine, 2004, p. 8.
- 12) コンデ（2001）、p. 154.
- 13) 他にもプロスペロがキャリバンに« Comment peut-on s'être si laid! »と言うときキャリバンが« Tu me trouves laid, mais moi je ne trouve pas beau du tout! Avec ton nez crochu, tu ressembles un vieux vautour! »と反論している場面がある。（Césaire, *Une Tempête*, p. 24.）
- 14) *Ibid.*, p. 88.
- 15) *Ibid.*, p. 24.
- 16) *Ibid.*, p. 89.

déclament

*Shango marche avec force
à travers le ciel, son promenoir!
Shango est un secoueur de feu
chacun de ses pas ébranle le ciel
ébranle la terre
Shango Shango ho!*

- 17) Uhuruが団体や個人の名称として使われることもしばしばある。例えばブラック・ウフルBlack Uhuruというジャマイカの有名なコーラス・バンドがあるし、アメリカの人気SFテレビドラマシリーズ『スター・トレック』にはウフーラUhuruという黒人女性が登場する。
- 18) パトリック・シャモワゾーとラファエル・コンフィアンの『クレオールとは何か』においては、彼らがクレオールのと評価するサン＝ジョン・ベルスと比較して、次のようなことが述べられている。「セゼールの方は植民地のこの町、自分が闘わねばならないこの町に向き合って、まったく外部にいる」（シャモワゾー、パトリック／コンフィアン、ラファエル（西谷修訳）『クレオールとは何か』、平凡社、1995、p.261.）一方マリーズ・コンデは、あらゆる言語は複数性が備わっているものであり、またセゼールはセゼールで固有の言葉を持っているのだ、として彼を擁護している。
- 19) Césaire, *op.cit.*, p. 92.
- 20) « Maintaining the State of Emergence/y: Aimé Césaire’s Une tmepête », Hulme, Peter; William H. Sherman eds., *The Tempest’ and Its Travels*, Reaktion books, 2000

参考文献（注で挙げたものは除く）

Barker, Francis; Peter Hulme; Margaret Iversen, eds., *Cannibalism and the Colonial World*, Cambridge Univ. Pr., 1998

今福竜太『クレオール主義』増補版（ちくま学芸文庫）、筑摩書房、2001

セゼール、エメ（砂野幸稔訳）『帰郷ノート／植民地主義論』（平凡社ライブラリー 498）、平凡社、2004

セゼール、エメほか（本橋哲也編）『テンベスト』、インスクリプト、2007

本橋哲也『ポストコロニアリズム』、岩波書店、2005

本橋哲也『本当はこわいシェイクスピア』（講談社選書メチエ312）、講談社、2004